をしてくれました。

チフスだろうとこのような病人が多勢でて元気な人達は別の収容所に移されました。病人ばかり残ってどうすることもできません。死を待つばかりでした。団長さんをはじめ世話人など次々に亡くなりました。寝たきりの私は骨と皮ばかりの体をシラミが食うのですが、そのシラミをつぶす力もありません。

団員の誰かの話で、子供が欲しいという満人の家に連れて行かれましたが、私の病気は悪くなるばかりで、水も口に含むことができず、八日間ただ夢中で眠り続け、気がつき少しづつ良くなってゆきました。二か月ぐらいして今度は満人が病気になり、私に帰ってもよいと言われ子供を残し富士青年学校へ戻りましたが誰もおりません。きれいに片付いていて庭の墓もなくなり、一台の荷車に死体が積まれてあり私を睨んでいるようでした。収容所を捜し歩き暗くなってようやく春日小学校の収容所に着きました。そこには隣家の人たちもおりとても心強かった。

六月末頃奉天市和平区漢口街の収容所を引揚げることになり、奉天駅の広場に何千人と集まり、今度は客車でした。途中何回もＤＤＴ消毒や注射を受けコロ島から船に乗ることになりましたが、その時の私の気持ちは、体二つになりたかった。それは半身は子供と現地に、あとの半身は子供を連れて内地にと複雑な気持ちでした。

引揚げて一日も忘れることのなかった中国に残した二人の娘から便りがあり、竹子は昭和五十四年十二月十九日、繁子は昭和五十九年四月十七日に一時帰国して会うことができました。戦争とは一体誰が幸せになるのでしょうか。

敗戦と在満邦人の苦闘

山形県　斎藤藤子

私が渡満したのは、小学校三年生の秋、昭和十五年九月の末でした。

当時我が家では、祖父母、父母、私達兄弟四人の八

人家族でしたが、祖父母と長男で私の弟の三人は財産処分が終ってから渡満することになっていたが、祖父母は満州移民は進まなかったようである。

戦争はしだいに苛烈を極めており当時、召集兵や、私達のような国策としての満州移民の見送りで、手旗の日の丸はいつもどこの家にもあった。親類の人達、友人、隣近所というより、部落全員で駅頭までのお見送りであった。満員の汽車にゆられ、現地入りしたのは昭和十五年の九月末だった。夕闇せまり、薄暗くなった団本部前の広場に集まり、太田団長への挨拶をし、それぞれの宿舎に配置された。薄暗いランプの灯が、異国にきたことを象徴するかのようであった。そして満州開拓生活の第一歩が始まったのでした。

私達学童は、学校もなく、つぎつぎに増えてくる開拓団の子を一・二・三年生。四・五年生。六年生、高等一年、二年生の三つに分けられ、倉庫の片隅の仮校舎で、三澤校長先生、鈴木先生、滝本先生の三人により教えられたが、昭和十六年七月、洪水がおこり、教室は点々と移動し、満足な勉強もできない有様であった。

大陸の洪水は水が引かず、平地に作づけした物はほとんど収穫ができない状態で、こんなことから、団員間では移転をせまる者もあり、殺伐とした空気があったが、太田団長の人柄がこれを治め、建設も着々と進み、第二の祖国の進展は目ざましいものであった。

しかし一方、大東亜戦争は苛烈を極め、有力な働き手の男性は次から次へと召集され、戦雲の暗さを感ぜざるを得なかった。

昭和十八年頃から若い働き手がぞくぞくと召集され、十九年には若者はほとんど駆り出された。二十年には、一層激しくなり、男性はほとんど出征し、心細い状勢となってきた。

残されたのは年寄りと女子供らで、淋しい日々が続き、治安維持上にも不穏な空気が流れた。現地人の私達を見る目も変わったように思われた。

やがて昭和二十年八月十五日、日本国のかつてなかった最悪の敗戦の日がきた。私達が知ったのは十五日の夜でした。幼い私達には、今後どうなるのか、不安

はつのるばかりであった。

敗戦の声を聞くや、これまで親しくしていた住民は一変して敵となり、衣類や食糧を取上げるようになった。それに加えて、匪賊の集団はこれに輪をかけた行為であった。いろいろな理由をつけてわれわれを団外に追いやり、留守の間に家財の一切は勿論目ぼしい物すべて取上げていった。おまけに家屋に火を放ったり暴行が行われた。

引き揚げた匪賊にやれやれと思う間もなく、ソ連軍の侵入で一層苛酷さをきわめた。ソ連兵の暴行を止めに入った校長先生は銃で撃たれ、腹部貫通の重傷を負った。このような事件がつぎつぎと起こり、銃殺、惨殺、と生き地獄となった。

暴行を受け、泣き叫ぶ声、怒号する声、威嚇射撃か、狙撃なのか、パパパンと連発銃の音もする。こんな毎日が続くある日、隣りの開拓団義合からの救援要請があった。連日の匪賊の来襲で重傷者が多く、脱出救援を要請され、五十人の救出隊を編成し、必死の覚悟で、これらの人々を無事救出したが、惨たんたる姿であった。

この頃から、衣・食・住にこと欠くようになっていた。原住民のところで働き、生活をたてる以外にはなかった。それも先方の言うがままの条件で働かされ、食事さえ満足でないところもあった。

かくして日増しに悪化する治安は、人びとの希望も夢もなく、ただ、帰国のみを念頭に働いていた。生きてはずかしめを受けるより、いざという時には自決せよと各自には「青酸カリ」がくばられた。

このような状況で、いつまでつづくのやら見通しすらたたない毎日に、自決者、病死者が続出するようになった。校長先生一家も報告隊員を含め、自決してしまった。

労役割当が八路軍や正規軍から要請され、毎日のように出さねばならず、暗い毎日の生活であった。

昭和二十一年八月、帰国命令が出され準備にかかったが、すべて取上げられて、裸一貫となっていた。集められるだけの身の回り品と食糧を抱え、チチハルまでの約四十里の道を隊列をつくっての行進であった。

一夜の野宿は、蚊の襲撃であかし、とうもろこしの皮でつくった草履は底は破れ、なわやつるで巻きつけ、気がついてみたら足はふくれあがり、死ぬ思いの逃避行であったが、チチハル到着は地獄に佛であった。

その後、乗船までの長い旅は、大陸の冬の訪れに飢餓と寒さに耐え兼ね、幾度か自決の念にかられたが、故郷の土を踏むまではと歯をくいしばった。このような状況下で、祖父母と妹の三人は中途で倒れ、無念の最期をとげた。

その後一家は病気におかされ、病院船でコロ島より出港、博多港に上陸、帰郷についたが家なく、食なく、着のみ着のままの私達、引き揚げては来たものの、生活苦が又待っていたのである。

生後間もない幼な子を連れての避難行

福島県　安藤シン

私は昭和十八年十月、安藤文雄と結婚、新京市の陸軍官舎で新婚生活をはじめた。夫は、満州第二航空軍司令部軍属の通信手として働いていた。

生活は軍関係の仕事で、比較的裕福であったが、遠く故里を離れた満州での新婚生活は、どことなくなじめない気持で、すっきりしない毎日だった。

十九年八月十五日長女弘子が誕生し、親子三人幸福な生活を送っていた。二十年八月九日午前二時、突然けたたましいサイレンが鳴り響き、深い眠りからびっくりして起こされた。私達はなにがなんだかわからなかったが、ソ連機の空襲で、無気味なサイレンと、キラキラと青白い閃光が夜空に光り、生きた心地がしなかった。ソ連軍の侵攻は、またたく間であり、八月十